

強い茎葉処理というのは、指導されているレグロックス10aあたり300ccの1回散布では枯死しないような旺盛な生育の増加により、2回散布、夜間散布、指定外の強い薬剤の散布をいう。多肥になると出来遅れとなり、早生品種が晩生品種の生育型になるといえるのがバレイシヨの特性で、8月中旬といえは晩生品種でさえ生育最盛期から約20日も経過しているというのに、正に生育最盛期かまたはまだ最盛期に到達しない伸長中のものまでである。その証拠に第3花房という晩生品種にさえ不要な生育が開花の最中というのが多い。このような旺盛さだと1回処理で枯死しないばかりでなく、地極部^{ちぎわ}から直ちに再生育がおこり、その若葉へアブラムシがびっしりとついている。これをみれば「再生がおこるような生育段階で枯凋処理してはならない」ということがわかる。

ある調査によると移行型のホルモン性除草剤が使用されていることもわかった。それは維管束褐変ならずとも発芽力を損う。もし出芽しても生育は異常となる。これをみたとき農業にケミカルコントロールを持ち込んでほならないということを再確認したものである。

充分認識してもらいたいのは、「多肥に投資しその後始末に再び投資するの愚」が、農業のあらゆる場面に存在することである。多肥のバレイシヨの後作に秋まきコムギというのが多いが、そのコムギがバレイシヨ作の残効と、春の起生期の追肥で伸び過ぎ、倒伏と穂発芽による減収や落等（等級の低下や等外になること）をおこす。れそを防ぐための止葉出葉期にホルモン性抑制剤の散布が指導され常用されているのはナンセンスである。とくに最近の品種は短稈耐倒伏の育種がされ、容易に倒れないことを経験している者にとって「ヒンシュク」ものである。

ほ場に株ごとの生育のバラツキが少く、8月中旬には晩生の品種でさえ黄変の進んだ生育段階にする技術をもてば、茎葉に含まれた炭水化物やチッ素その他の養分の大部分が芋へと移行し、芋の周皮は完成して受傷し難く、休眠が深くて貯蔵性の高い種芋がえられ、機械収穫で茎葉がじゃまになるということはないものである。それでは収量がえられないと主張する場合があるので、次項に述べるような「高品質・低コスト・多収種芋生産」の研究を発表してある。 —以下次号—

常識法話

◇ハンコの不思議◇

数年前のこと、大阪の経営団体の依頼で登記のセミナーを開き、登記には盲判は通用しないと説明したら、主宰者があわてて「大阪でそんな差別用語を使うと、社会問題になる」と脅かされ、慌てて取り消し、陳謝したことがあった。それでは三文判という用語も使ってはいけないのかと思ったが、之は思い過しであったようだ。

法律上問題になるのは、実印であって、

個人であれば市町村役場が印鑑証明書を出してくれる印、法人であれば登記所が証明してくれる代表者印がこれに当る。「認印（みとめ）」はデパートの配達品や書留を受取るときのハンコ。「銀行印」は、企業が振出す手形、小切手等を払い出す銀行が照合して偽造か否かをチェックするため、取引銀行が届出させて置くハンコである。「書き判」は筆等で特色附けた個人のシンボルである。